

38. 相浦富士と真^{まさ}申^{さる}化石帯

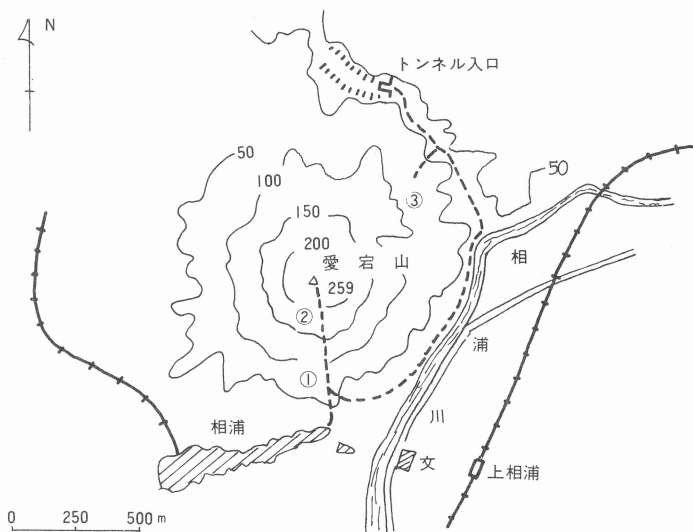
- 地域** 佐世保市愛宕山—相浦川西岸国鉄北松線（私鉄時代の旧軌道）トンネル入口
- 交通** 国鉄相浦駅下車
- 地形図** 佐世保（1/50,000），佐世保北部（1/25,000）

相浦の愛宕山は別名相浦富士とも呼ばれて土地の人に親しまれている。海拔 259m，相浦平野に孤立した秀麗な円錐形の山である。一見火山のようであるが，神社横の登山口より一歩足を踏み入れてハンマーで露頭を調べると，浸食によってできた残丘であることが容易にわかる。自然の力による造化の妙とはいえ，よくもこんなにみごとに均整のとれた山型ができたものだと感心させられる。

① 登山道は南側より頂上へ一本道で，山脚に新田四尺層の露頭が見られる。かつて日野炭鉱で稼行^かされた炭層である。炭質としては 6,000 cal にも満たない低品位炭である。露頭はいわゆる“焼け”にて層厚も明らかでない。

次いで凝灰質の岩層が砂岩中に何枚もレンズ状にはさまれているのに気がつく^{*}。砂岩，けつ岩の粒度にもよく見ると，明瞭ではないが堆積^{りんね}の輪廻が認められるようだ。迷彩砂岩ともいわれるように褐鉄鉱による汚染もこの佐世保層群の砂岩の特色である^{**}。とにかく地層がほぼ水平に整合に重なっているのだから，ルートはまるで柱状断面図を下部より点検していくようなものだ。しかし一直線に近い道路にだけ露頭があって，他に露頭らしきものがほとんどない。

② 標高 200m 位の地点より玄武岩の転石が急に増えてくる。山頂部は玄武岩におおわれているが基盤との境界は露頭としてあらわれていない。これより北方 2 km の八ノ久保一帯では，基盤の堆積岩とそ



愛宕山・真申化石帯

の上をおおう玄武岩との間にはれき岩層がよく発達しているが、ここではそれが全く認められない。

北松玄武岩類の活動が始まる以前、この地方全域が準平原化していたであろうことは容易に推定される。しかし砂れき層がどうして限定された地域にのみ分布するのか。それはどんな堆積環境の違いによってもたらされたのか。この第四系に属すると考えられる砂れき層中のれきには、それよりはるかに古期岩石と思われるチャート等を含んでいるが、一体それはどこから流れてきたものでしょうか。

③ 真申化石帯とよばれている旧軌道より西方へはいった谷間の地層からは、海生の二枚貝とかきの化石をわずかに採集できるが、現在では今迄報告されているように多種の化石に接することは困難である。

参考までに遠藤隆次著の植物化石図譜によると新第三紀の最下部にあたる相浦型化石群には次のようなものが見られる。

Betula (カバ属), *Rosa* (バラ属), *Ulmus* (ニレ属), *Berberis* (メギ属), *Tilia* (シナノキ属), *Liquidambar* (フウ属), *Alangium* (ウリノキ属), *Sophora* (クララ属), *Metasequoia* (メタセコイア属), *Cercis* (ハナズオウ属)

そして本型の植物群は現在のところ佐世保炭田から知られているのみであって、将来本州の内帯から北海道にかけて広く分布するグリーンタフ基底部付近からも同型の植物群の発見が期待されるといふ。ただもの珍らしさと好奇心で眺めてきたこれらの化石も、実は日本で稀少価値をもった貴重な存在である。 (小林 茂)

※ この付近でも地層の横の変化が著しく、水平方向の追跡が困難であるが、この凝灰質砂岩層、特にその中でも炭層中に挟みとして含まれたものは鍵層として役立っている。かつて北松炭田が稼行されていた当時この挟みとして含まれた凝灰質砂岩層は“ゴマ”とよばれ、あるいは当地方に数10枚以上もあって紛らわしい炭層がもつ個有の特色という意味で“かざり”といって現場の人がそれぞれの炭層を識別する際の有力な手がかりとして利用されていた。このフィールドは凝灰質の砂岩層やゴマの観察には誠に好適な場所といつてよからう。

※※ この褐鉄鉱を集めて閉管試験をやり、その化学組成 $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot n\text{H}_2\text{O}$ の結晶水が水滴となって、試験管の入口に付着するのを確かめてみるのもよからう。